

わたしはまことのぶどうの木

三 木 メ イ

奨励者紹介[みき・めい]

同志社大学キリスト教文化センター助教

[研究テーマ]キリスト教の実践神学(女性学、人間関係、牧会)

「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。わたしにつながっているながら、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる。しかし、実を結ぶものはみな、いよいよ豊かに実を結ぶように手入れをなさる。わたしの話した言葉によって、あなたがたは既に清くなっている。わたしにつながっていないさい。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながっていなければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながっていなければ、実を結ぶことができない。わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。」

(ヨハネによる福音書 15章1―5節)

秋学期のはじめに

秋学期最初の水曜チャペル・アワーです。皆さん、夏休みはどんな生活や体験をしたでしょうか。旅をして初めて行った町、出会った人々、自然の中で遊ぶとか、楽しく有意義にすごせたでしょうか。あるいは、なかには辛く苦しい想いをしたという人もいるかもしれません。いろいろな経験のすべてが皆さんにとっての成長の糧になっていくことを願っています。とにかく、またこのキャンパスに戻って、秋学期の学びを共にできることを感謝して始めましょう。

同志社ゆかりの地、熊本を旅して

私は、9月6～8日に、キリスト教文化センター主催の「熊本キャンプ」に行きました。同志社ゆかりの地として、熊本バンドの人たちの出身地を訪ねるこの旅の今年の参加者は、学生6名と教職員4名の計10名でした。熊本キャンプは、2年に一度開催してきましたから、私はこれまで何度も熊本に行ったことがあります。しかし今年の熊本への旅は、これまでとはかなり違う旅となりました。昨年4月に起こった地震によって熊本市内も大きな被害を受けていたからです。それでプログラムを一部変更して、熊本城の被災状況を見学したり、実際に被災した大学生のお話を聞いたり、被災者の支援活動を実際に行ったYMCAの方のお話を聞かせていただく時間を設けました。日本三大名城の一つと言われた熊本城は、あちらこちらで石垣が崩れてしまい、その復旧工事には20年かかるだろうと言われているそうです。ボランティアのガイドの方が、城の周りを一緒に巡りながら詳しく説明してくださいました。熊本バンドの人たちに初めてキリスト教を教えた教師の住居として作られた古い洋館、ジェーンズ邸は被災して完全に崩壊してしまいましたが、その跡地にも行ってみました。一昨年に訪れた時には、その建物の中に入って説明を聞いた

のですが、そこにはただ建物の土台が残っただけでした。

悲しかったですね。心が痛みました。目に見えるものは、いつかは失われていくという厳然たる事実を改めて感じました。今までは、そこに在って当然だと思っていたものが、ある日突然失われる、崩壊するということが起こる時には起こるのです。建物や城や石垣だけではなく、周りのすべての目に見えるものの存在は儚いものだな、と思わされます。しかし、その一方で、失われたものをまた再び蘇らせるために、かつての姿を取り戻そうと努力する人間の強い想いや逞しさも感じました。熊本城の修復工事も行われています。ジェーンズ邸も3年後には再建するとのことですよ。

人とのつながりの大切さ

目に見えるものも、目に見えないものでも、失われて初めて、私たちがその存在の大切さに気づくということがあります。昨年、南阿蘇で大学一回生の時に被災した方のお話を聞きました。その学生の方が大学に入学して下宿をしてまだ2週間という時に、突然地震に遭遇し、下宿の電気などのライフラインが切れてしまいました。その下宿は山間部の地域にあり、町に繋がる橋が落ちて、すぐにそこから避難することができない状態になり、とても恐い経験をしたそうです。その時に、下宿の家主さんや先輩の人たちがいろいろ助けてくれたので、何とか力を合わせて避難できる日までそこで生活し、人と人とのつながりの大切さを実感したとのことでした。私たちは皆、いろんな物や人とのつながりの中で、生かされています。それを、日常的には当たり前と思ってすごしていますが、非日常的な出来事に出会って初めて、そのつながりの大切さに気づく、ということがいろいろあるのではないのでしょうか。

ぶどうの木とその枝とのつながり

さて、今日の聖書のお話をしましょう。秋学期の統一テーマは、「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である」(ヨハネによる福音書15章5節)です。この聖句は、キリスト教会でもよく用いられる有名な言葉です。たとえば、私が子どもの頃に教会の日曜学校でもらった鉛筆には、この聖句が印刷されていたのを今もよく覚えています。現在も、本に挟むしおりで、布にこの聖句が刺繍してあるものが教会用品として売られています。そのくらい、いつも心に留めておく聖書の言葉として、大切に語り伝えられています。

この聖句はイエスの言葉として書かれていますので、これを聞いているのが弟子たちだとすると、「ぶどうの木」がイエスで、「その枝」は弟子たち、ということになります。枝は、その木の幹につながっていなければ成長することもできないし、実をつけることもできません。枝はその木の幹によって地面からの水分と養分を得て成長し、葉を繁らせ、日の光を十分に浴びて、花や実をつけるまでに大きくなっていきます。そのように、イエスとつながって成長していくことによって、弟子たちやキリスト教会の人々は、最後に「ぶどうの実」を実らせることができるのだ、と言うのです。逆に、もしそのつながりを失ってしまえば、実をつけることはできない、と言うのです。

神とのつながり

ヨハネによる福音書15章1節からもう一度読んでみましょう。

「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。わたしにつながっているが、実を結ばない

枝はみな、父が取り除かれる」。

「わたし」はイエスで、「父」は父なる神のことです。神様が農夫として、ぶどうの木＝イエスを、その土地に植えた。この木を手入れするのは農夫の神様で、実を結ばない枝があればそれを取り除いて、その他の枝は豊かに実を結ぶように手入れする、というわけです。少し恐い感じもするのですが、実際のぶどうを育てる場合に、実をつけない枝を取り除いていたのでしょう。これは、神の裁きを象徴的に表しているのだらうと思われます。

だからそうならないように「わたしにつながっていなさい。わたしもあなたがたにつながっている」と書かれています。イエスといつもつながっていることが大事だ、ということはかなり強調しているのです。しかも、何だか上から目線でこんな偉そうなことを言っていたのか、という感じがしますね。しかし、この言葉はヨハネによる福音書にしか書いてない言葉です。ヨハネによる福音書には、イエスが「わたしは道であり、真理であり、命である」と語ったという箇所もあります。これも偉そうな感じがしますが、ヨハネによる福音書にしか書いてありません。おそらくこのヨハネによる福音書を伝承したヨハネ教団には、キリスト教迫害などの影響によって教団から離れていってしまう人々がいたのではないか、と思われます。ですから、ヨハネ教団の人が、「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である」という言葉をイエスのものとして書いて、キリスト教信仰をもち続けるよう呼びかけたのではないか、と考えられるのです。

「ぶどう」は、聖書によく出てくる果物です。今ちょうど美味しいぶどうが出回る時期ですが、2000年前のぶどうは、きっと酸っぱくてそのままでは美味しくなかったかもしれません。パレスチナ地方で、ぶどうの実からぶどう酒を作るということは、かなり昔から行われていたようです。旧約聖書の中でも、「ぶどうの木」や「ぶどう園」が譬えとしてよく用いられています。そして、「ぶどう」は、神のわざや神の恵みを表していることが多くあります。このヨハネによる福音書の箇所では、「ぶどうの実」は「神の救い」、または「真の命」の譬えとして語られていると解釈することができるでしょう。

「ぶどうの実」を实らせる

私たちは、誰でも生きる意味の感じられる本当の喜びに満ちた、充実した人生をおくれるよう、日々何らかの努力をしています。その目指すところは、この「ぶどうの実」の一つでもあります。その実を实らせるには、自分の努力だけではなく、いろんな人とのつながりや環境を通して得られる、成長を促すさまざまな水分や養分や光が必要不可欠です。ですから、自分の周りの勉強できる環境や、日々出会う人々の存在を「当たり前」ととらえるのではなく、それらを今与えられていることに感謝して、そのつながりを大切にしていきましょう。それが自分自身の「ぶどうの実」を实らせることにつながっていくでしょう。

イエスは、神を愛することと、隣人を愛することが最も重要な掟だ、と教えました。そして、イエスご自身、神と人、人と人とのつながりを回復するためにさまざまな教えを残し、その使命を果たしました。その教えから、私たち自身を成長させる大切な栄養分をしっかりと吸収していきましょう。